

精 神 療 法

第21巻 第4号 別刷
1995年8月 通巻第89号

自閉症の青年期発達と精神療法について

小 林 隆 児

Ψ 金 剛 出 版
T O K Y O

自閉症の青年期発達と精神療法について

小林 隆 児*

はじめに

自閉症といわれる人々もわれわれと同じようにライフサイクルにそった情緒発達を遂げていくことは、最近になってやっと認識され始めた(小林, 1991)。自閉症の言語認知障害仮説は自閉症の原因を脳障害に帰しているため、多くの人々はその障害の質的検討について関心を向けやすかった。それと相まって自閉症器質論以前の心因論華やかかりし時代での母親原因説に対する反動形成なのか、自閉症臨床を養育者との関係でもって論じることがタブー視されてきたように感じられるのである。このような時代的背景のなかであって、自閉症に対する心理療法や心理的援助への関心はつい最近まできわめて低かったといわざるをえない。

しかし、自閉症の人々の青年期、成人期に至る発達過程をつぶさに眺めていくと、彼らもわれわれと同様にそのライフサイクルのステージにおいてさまざまな発達課題にぶつかり悪戦苦闘しながらも着実な歩みを示すものだということが次第に明らかになるとともに、最近になって自閉症者自らのまとめた手記の出版(Williams, 1992)を通して彼らの精神内界が行動観察からはとても推測できないような混沌とした恐怖に満ちた世界であることが知られるようになった。そのことにより、彼らへの心理的援助の重要性が叫ばれるようになってきた。

本稿の目的は青年期の自閉症の人々に対する精神療法ないし心理的援助の意義について論じることにあるが、最初に自閉症の人々の青年期発達の特徴を具体的に描写する。ついで青年期にみられた特徴的な精神病理がいかに青年期の発達課題と関連しているかを指摘するとともに、精神療法が果たす役割を論じてみたいと思う。

I 自閉症の青年期発達について

最初にある青年期の症例を提示し、自閉症の人々の青年期発達の特徴を素描してみよう。本症例の治療経験は、青年期に入ってから彼らが心理的自立への道を歩むさいにどのような情緒発達のプロセスをたどっていくかを筆者に如実に教えてくれたことにより忘れることができない。

次郎 初診時11歳

主訴: 人に噛みつくので脳波をとってほしいという担任教師からの依頼で母子来院。

家族構成: 父は典型的な職人気質の人である。母は次郎が小学校に入学してからパートタイマーとして勤務している。小学2年、新居に移り、父方祖父母が同居。昼間は祖父母が次郎の世話をしていた。父のしつけは厳しく、叱ってはタバコの火を身体に押し当てるなど、虐待を思わせるほどであった。

発達歴: 微弱陣痛、臍帯巻絡で仮死状態。満期出産。生下時体重3,800g。保育器は使用せず。乳児期、おとなしく寝ている子。頸座3カ月、独歩14カ月。幼児期、人見知りがなく、あやしても反応は乏しい、母がいなくても平気にしていた。ことばを覚えず、TVのCMのせりふを覚えて言うだけであった。2

Adolescent Development and Psychotherapy in Autism.

* 東海大学健康科学部社会福祉学科, Ryuji Kobayashi: Department of Social Work, Tokai University, School of Health Sciences.

歳、障害児母子通園に参加。幼稚園時代、多動であったが、入学前には読み書きができるようになり、親としてはかなり期待していたという。

小学校は特殊学級と情緒学級に通うようになった。自分の思うようにならないとパニックを起し、何事にも強迫的こだわりの強さが一際目立っていた。

小学5年(11歳)、担任や同級の女の背中に後ろから噛みつくようになり、問題が深刻化していった。人から注意されたり、指示されることが気に入らず、防衛本能的に噛みついているように思われた。ある日、次のような出来事があった。国語のノートがもう書けなくなってしまったので、新しいノートを買わないといけないのに、母がお金を渡すのを忘れた。朝、学校の前の文房具店で国語のノートが欲しいと思い、ノートを買おうとしていたが金がなく、店員から学校に行くように言われて、つい興奮し店員に噛みついてしまったというのだった。このように自分があることを思いつくと徹底してやり通さないと気がすまない激しさが生活の中でいろいろな問題を起こしていった。こうした時期に筆者のもとに次郎は母親に連れられて来院した。

中核群に入る自閉症(Kanner症候群)で、強い同一性保持とそれがこわされそうになるとパニックを起こしては人に噛みつくという行動パターンが習慣化していた。言葉の遅れがみられ、CMのつぶやきが目立つ状態であった。WISCではTIQ49(VIQ44, PIQ68)、中等度精神遅滞の合併が認められた。次郎には生活時間へのこだわり(就寝時間を曜日ごとに決める)がとても強かった。しかし、彼がこのようにまでひどく自己防衛的な行動に駆り出される背景には、先に述べた虐待ともとれるような厳しいしつけをする父親への恐怖心が対人反応の基本に大きく影響していることが推測された。

治療方針: 情動面の鎮静化のための薬物療法とともに家族力動面の理解を通して家族への介入も時には必要かもしれないと考えられた。

治療経過: 治療開始1~2カ月後、睡眠は改善し情緒面の安定につれ、それまでの文字の乱れも改善していった。パニックも急速に減少していった。次郎自身も自発的に服薬するほどになった。偏食も改善していった。しかし、強迫的こだわりは残存し、来院の際にはいつも次回の診察予約日を自分で決めて

絶対にそれを書かないと納得せず、筆者が抵抗すると、筆者の手を噛みつこうとするほどであった。

まもなく両親は別居し、母子3人で独立した生活をもつようになった。母は自分でとにかくこの子を育てていこうと一大決心をした。すると母を求めて「おかあさん」と言ってくるなど、母子の依存関係が芽生え、母もこうした変化に感激して、母親の存在の喜びを語るようになった。TV番組「おかあさんといっしょに」を見て体操の模倣をするようにもなった。このように乳幼児期の再現を思わせる母子間の交流が生まれてからは、それまでの極端な同一性保持や強迫的こだわりは目に見えて減少していった。

この頃筆者が関与していた自閉症児療育キャンプ(小林・村田, 1977)に参加するようになったが、当時はいまだ集団生活での不安と緊張が強く、キャンプ中に担当治療者に頻繁に噛みつくなどいまだ適応困難な一面を見せていた。

12歳、体重が急激に増加していったが、情緒は安定し、表情が良くなり、他児の行動にも関心を示すまでになった。学習能力、言葉の表現力もそれまでにないほどの目覚ましい伸びを示し始めた。

中学1年、身長160cm、体重75kgと身体は急速に成長していった。この頃、母は交友関係の広がり期待して次郎をボーイスカウトに入隊させた。馴れるまでは緊張も強く心配されたが、同年齢の仲間との交流は次郎の心に充実感をもたらしたようであった。家の中でも母の家事を見ては、クラフト・針仕事・アイロンがけに興味を示し始め、すぐれた能力を発揮した。このように創造的活動に没頭していった。

中学2年の夏、ボーイスカウトで富士山合宿が行われ、母は初めて子どもを親元から離して合宿に参加させた。これが契機となって自立心が急速に育っていった。その2カ月後、母は胆石手術で1カ月入院し、次郎は姉と2人で生活するという体験をした。このような体験は彼に自立心が育つ大きなはずみをつけた。こうした成長を母は少し距離をとって見守る傍らで、母自身もスポーツを通して自分の楽しみをもつようになっていった。子どもが自立し、自分の世界をもつようになったことと同時に、母自身も自分の世界をもって楽しむようになったことで、母子関係は一段と変化し、彼は学校の様子を母によく話すようになり、母子でふざけあうなど明るい雰囲気

気が家庭の中に生まれるようになった。するとそれまで目立っていた強いこだわりも少しずつ緩和し、もの忘れをしても「仕方がない」といって諦められるまでになっていった。日常生活のスケジュールの変更にもひどいパニックを起こさなくなった。

このように彼は次第に精神的な成長を見せはじめなかで、中学を卒業して施設に入所した。当時身長は170cm、体重90kgとかなりの肥満があった。

入所当初はパニックがひどく心配されたが、放っておくと一人でおさまる程度であった。母も当初は分離不安が増強したが、次郎の方が逆に母を励ますかのように「僕は〇〇園に行きます」と言うほどで、さほどの混乱も示さず、短期間で母子ともに安定していった。2週間に一度の帰宅の際には、母は「ときめき」を感じるほど子どもに会うことに喜びを感じるようになった。ハイキングの弁当に「おいしそう」と次郎も喜びを表現するほどであった。

入所した2カ月後、体重10kg減少。間食を要求することもなく、自己コントロールの力がついてきた。6カ月で体重は30kg減少した。言葉の使い分けもできるようになり、丁寧語を使うまでになった。それまで必ず母が切ってやっていた髪の毛を切られるのを嫌がるようになった。母は不安を起したが、おしゃれへの関心から髪の毛を伸ばしたがるようになったんでしょと筆者が説明すると、母も安心し、実際そのようであったと確認して母もこの子の成長を喜べるまでになっていった。

本症例の治療経過を振り返ってみると、治療の大きな転機となったのは、母親がこの子を自分の力で守り育てていこうと一大決心したことにある。それまで夫や祖父母との関係でいろいろと気づかいの多い生活を送り、母親はこの子の養育に没頭できるような状況にはなかった。恐らく母親としての役割意識も十分にもてないで情緒的にも孤立した状況に置かれていたのであろう。治療開始とともに、筆者との治療関係のみならず、療育キャンプなどを通して次第にこの母子を援助する多くの人々との出会いが生まれていったことも母親の意を強くすることにつながっていった。こうした周囲の人々に支えられながら、治療経過の中で次郎が一時的にパ

ニックを起こすことはあっても、母親は大きな動揺を示すこともなく、一貫して次郎を見守っていく姿勢を保つことができた。

ついで母子交流の変遷の過程をまとめてみよう。まずは母子間での依存的関係が深まってくにつれ、テレビを見ながら子ども体操を親子一緒に楽しむようになっていく。その後しだいに母親から他児へと関心が広がっていき、学習能力や言葉の表現力も伸びていっている。中学に入り、子ども集団への参加の機会が与えられたことにより、次郎の社会性は一段と進展するとともに、家庭の中では母を通して家事を見習い、クラフトや針仕事などの創造的活動に没頭するまでになっている。

このような長足の進歩を遂げていった後に母子分離の契機が訪れている。ボーイスカウトの合宿と母親の急病による入院である。このような母子分離の契機が不測の事態になることはさほど稀ではなく、このことが契機となって子どもの自立心が培われる例は少なくない(小林・村田, 1990)。

この期を境にして子どもの自立心が目に見えて育っていくのであるが、このような子どもの歩みを確かなものにしていった要因として見落としてならないのは、母親も自らスポーツなどを通して積極的に自分の楽しみを広げていったことである。つまり、障害児を抱え込んで自己犠牲的な生活を歩むことなく、子どもの自立の歩みに合わせて母親自身も子離れを段階的に進めていくことができているのである。子どもが親との分離不安を乗り越えていくためには、母親側にある分離不安が解消されることが不可欠であることがここに示されている。このようにして子どもも母親も自分の生活がより豊かになっていくことで母子交流は驚くほどに情緒豊かな色彩を帯びているのである。

青年期は第二の分離個体化といわれるように一般に幼児期の母子関係を再度繰り返すという側面があるが、自閉症児では、幼児期に母子間での依存的関係が十分に成り立たないままその関係を青年期まで引きずってきたともいえる特徴をもっている。両者の間でより自然な依存的

関係を経験しないままにきているために、いざ青年期を迎えると、両者の間に戸惑いも強いのが一般的である（小林・新保，1990）。本症例では主治医であった筆者が子どもの行動の変化の心理的意味を読み取ってそれを母親に翻訳するように伝えることによって、母親は今までに経験してこなかった子どもの依存欲求を十分に受け止め、その関係を楽しむ心のゆとりを持つことができたように思われるのである。

本症例は母子間の情緒的交流が深まるにつれ、乳幼児期の望ましい母子交流がこの時期になって初めて芽生え、本来の情緒発達が豊かに展開していつていることを如実に示している。恐らくは自閉症児の情緒発達に対する援助の最大の眼目はこうした情緒発達が母子間の関係の深まりのなかで繰り広げられるようになることであると思われるが、現実には多くの例においては自閉症児自らが背負っているハンディキャップとも関連して彼らの情緒発達は困難な課題に満ちている（小林，1991）。

II 青年期の病態理解と精神療法の意味について

つぎに、青年期に達したある女性の自閉症者にみられた病態が彼女の情緒発達の課題といかなる関連を有しているのかを示しながら、精神療法の意味についても言及してみたい。

明子 初診時25歳

周囲の人がみんなきれいで、自分だけ姿形がおかしくみえると盛んに訴え、強い劣等感と醜貌恐怖が強まって今ではそれが妄想化を呈するまでになっている状態であった。

家族状況をみると、11年前に父親が死亡し、現在、兄と母親の3人暮らしで、現在は親子ともに近所との付き合いを避け、社会的引きこもり状態になっていた。

3歳の時に自閉症と診断された明子であったが、知的遅れは軽度で、母親の熱心な養育の甲斐もあって、高校を卒業後、プラスチック工場に就労していた。しかし、頑固に対人接触を回避する傾向は軽減せず、職場でついに不応症を起こすとともに、父親

の死亡が重なったという事情によって都会から田舎への転居を余儀なくされ、その5年後に筆者は相談を受けることになった。

初診時、いつも相手の視線を回避し、始終頭髪を前に垂らしてうつむいたままの姿勢を続けているのが印象的であった。母親の言動にひどく敏感で、母親は明子の鋭い視線に恐怖心さえいだき、母子間に強い緊張があることが一際目を引いていた。自分の身体に対する囚われが強く、「自分は醜く、母は若くきれいだ」と非難するのであった。醜貌恐怖を思わせる病態で、周囲の人々はすべてきれいで（そのため自分は）悲しいと訴え、明子の思考内容は訂正不能で妄想化を呈していた。ただ実際、母親は年齢に比してはるかに若く見えセンスのよさを感じさせる女性であるのは確かだったが、周囲の人々すべてにわたってこのような考えが支配しているのが特徴であった。

治療経過：治療は原則として2週間に1回およそ30分の面接とし、明子と母親に交互に面接を行った。

治療の初期は母親への攻撃性が次第に激しさを増して、母子間の緊張関係はエスカレートの一途をたどっていった。それとともに、まな板の魚のマークの面をいつも裏返しにしたり、メンソレータムの絵を見て「この子はかわいいから」と裏を向けるなど、彼女にとって周囲の世界は、人々のみならずマークや描画の人物像までもが生き生きとして彼女に迫り来てその恐怖のために圧倒されている様子がうかがわれた。母親も世間体を気にして引きこもり、悲観的になっていた。

その後も母子間の緊張はますますエスカレートし、通院のためにバスに乗ることさえ困難な状況になってきた。明子は母親を罵倒し、母親と通院することさえ拒否するようになっていった。

面接で筆者は母親が自分の夫の死や娘の障害や失職、そして失意のうちの田舎への転居といった深い悲しみをいまだ受け止めることができない状態にあると判断し、喪の作業を円滑に行えるように、少しずつ過去を回想できる方向で支持的に接していった。

すると第64回から数回にわたって、母親は独身時代に自ら激しいダイエットを行っていたことが語られ始めたのである。そして口八丁手八丁で今日というスーパーウーマンの祖母の影響で、自分も高い（自

我)理想をもって娘の養育に励んできたことが明らかになってきたのである。さらには夫の死亡による挫折体験を味わっていること、いまだそのような現状を受け止めることがとても苦痛であることを語るようになっていった。

すると驚いたことに、このように母親の喪の作業が進んだ途端に、第69回になって、明子はそれまで見ることを極力恐れていたメンソレータムの女性像を気にしなくなったのである。そして筆者との面接に対する拒否的態度も薄らいでいった。そして高校時代の外傷体験を次のように語り始めたのである。「高校2年の時、みんなの顔がキリッとなって、私の顔だけだらっとなってきた、みんなの顔を見れなくなったの」「Kさんの胸が大きくなったところ、体育の時間に(見えたから)」というのであった。その時の様子を母親も想起しながら、「夫が入退院を繰り返し、そのために忙しく、看病に専念していた。この子の思春期不安を支えられなかった」と述べられるようになっていった。

母親は自分の緊張や外出恐怖が娘の気持ちと深く関連し合っているのではないかということに次第に気づき始め、「この子が緊張するのも私のせいかも」と述べるほどになってきたのである。明子も「ここに来て母の言葉がどんどん悪くなってきている」「私も母も少し悲しかったと思います」とメモに記し、母子間で喪の作業が深まってきたことが感じられるようになり、第89回で、母親は過去を涙ながらに語りながら、夫の存在の有り難みを回想するのであった。

すると次回には明子はそれまで拒否し続けていた歯科治療や採血を自発的に受け入れるという今までにない行動の変化を示し始め、母親は娘のそのような変り様を嬉しそうに語り、「ふたりは一心同体だと思おう」と実感するようになっていった。

先の症例では母子間での生き生きとした情緒的交流を通して自閉症児の青年期発達が繰り返し広がられていくことが示されていたが、本症例では青年期に入って第二性徴にまつわる身体像への囚われが高じて妄想へと発展したことが示されている。つまり女性性の獲得を巡る強い葛藤の存在が示唆されている。こうした青年期の

心的葛藤が解消されずに肥大化していった背景には、当時母親が癌に罹病した夫の看病に忙殺され娘の不安を省みる心のゆとりがなかったことがひとつにはあった。しかし、もっと重要な要因として母親への精神療法の中で明らかになったように、母親自身にも青年期において同様な性同一性を巡る葛藤が存在していたことである。このように母親自身も母親としての同一性を巡ってかなりの混乱状態を示していたため、母親への精神療法も容易には進展しなかった。しかし、母子間の強い緊張関係から抑うつ状態を呈していく中で、それまでの現実否認の防衛的態度が和らぎ、娘とのこれまでの生活のみならず、自らの青年期をも回想することが可能になり、次第に母親自身の内的葛藤が洞察されて解消されていったのである。すると実に興味深いことに、このようにして母親自身が自らの母性性を回復していくことによって娘である明子自身も引きこもり状態から脱皮することが可能になっていったのである。

従来、自閉症の基本障害は対人関係の成立そのものに最大の困難さがあるとされていたため、彼らが他者からの心的影響をほとんど受けることはないのではないかとさえ考えられていたのではないだろうか。そのために自閉症治療において精神療法の意義に触れられることもほとんどなかったのではないかと。筆者が本論で提示した二つの具体例はけっして例外的なものではなく、自閉症の人々も内面の深いところで他者との関係性のなかで敏感に反応している存在であることを知る必要がある(Williams, 1992)。

本症例において、母親自身の体験した母子関係の有り様が自分の娘との関係性に大きく反映している事実が示されている。母親自身の青年期発達における葛藤が母親から娘への養育を通して青年期を迎えた娘の内面の葛藤へと世代間伝達が行われているのである。確かに本症例の症状の発展の様相をみると自閉症特有な一面を考慮する必要があることはたしかであるが(小林, 印刷中)、母子間においてこのような内的葛藤が存在していることに自閉症の精神療法の果たす役割を見出す必要がある。

今日自閉症における自閉性、すなわち社会性の障害を再検討しようとする機運があるが、自閉症の社会性の障害の質的検討を行うさいにはコミュニケーションの構造そのものの成立基盤を考慮する必要がある。コミュニケーションは一般に二者間でのある観念のやりとりという水準で考えられがちであるが、実はその基盤に情動の共有という情動水準のコミュニケーションが深く存在していることを忘れてはならない(鯨岡, 1990)。これまで自閉症治療のなかで認知言語障害に対する指導を考える上で、こうした情動水準のコミュニケーションの重要性がないがしろにされてきたのではないだろうか。

では情動的コミュニケーションはどのようなプロセスを経て成立していくのであろうか。自閉症においてはそれがなぜ成立困難なのであろうか。自閉症の基本障害と治療を考えていく上で情動的コミュニケーションの問題の検討は決して副次的なものではなく、自閉症の成因そのものに迫るほどの重要な問題であると筆者は考えているが(小林, 1993)、先に述べた二つの具体例をみると、母子間での情動的コミュニケーションの成立いかんが彼らの精神発達そのものの良否を決定づけるほどの意味を持っていることが示唆されているのである。前者の例(次郎)では母子間で情動的コミュニケーションが豊かに展開していくと、さまざまな人々との対人交流を通して多くの文化的所産を獲得していくことが可能になっているが、後者の例(明子)では母子間において情動的コミュニケーションが今日まで困難な状況に置かれていたために、ついには自らの葛藤に囚われてしまっている。その後の治療によって母親自身の内的葛藤が解消されることによって、母子間での情動的コミュニケーションが芽生えてくるのである。母親への精神療法によって初めて母自身が自らの母性性の回復ないし獲得が可能になり、そのことによって母子間でおそらく初めてであろうところの情動的コミュニケーションが展開し始めているのである。

未知の世界に投げ出された乳児が自らの環境世界を意味づけていくさいに大きな手がかりを

母親のかもしだす情動的变化から得るとされ、それは母親参照 maternal referencing (Emde & Sorce, 1983) といわれている。そのような手がかりを得るための母子関係が成り立つためには両者間で情動の共有、つまりは情動的コミュニケーションが不可欠なのである。おそらく今回提示した2症例ともそうした母子関係が成立しえたがゆえに、その後の自閉症の人々の情緒発達が促進されていったと考えられるのである。

われわれは従来あまりにも自閉症の人々の内的世界に無関心であった。彼らの内的世界は、われわれが彼らの行動観察を通して想像するものとはあまりにも大きな隔りがある。恐らく彼らにとっては、この世の社会に自らの足で第一歩を踏み出すには、あまりにも巨大な不安と恐怖に包まれているのではなかろうか。そのことを十分に考慮することなく一方的にこちら側から多くのことを学習させようと働きかけることは、彼らにとってどのような意味を持つのか、自閉症の療育に携わる者はそのことを肝に銘じておく必要がある。

本論で筆者は、自閉症治療において社会的技能を獲得させるための多くの働きかけが無意味だと述べているわけではけっしてない。そのことがこの世で他者とともに生きていくためには欠かせないことは改めて言うまでもない。しかし、そのような学習過程が自らの生きる力となるためには、その基盤に彼らの望ましい情緒発達が保証されることが不可欠になる。そのために彼らへの精神療法的援助がまずもって要請される必要があることをとくに強調したかったのである。もしそのことがないがしろにされて彼らに対してあまりにも性急な働きかけがなされるならば、自閉症の人々の不安をますます増大させ、後に多様な病的行動へと駆り立てることになってしまうのではないかという強い危機の念を筆者は抱いているのである。

おわりに

最後に付け加えたいのは、自閉症の人々へのこうした心理的援助を考えることは、ただ彼らの情緒発達を促進していくといった一方的な問

題ではなく、われわれ自身の内面の問題とも深くかかわっているということである。自閉症の脳障害仮説が広く受け入れられている今日、自閉症の成因に親や養育者の問題を取り上げるとはほとんどタブー視されているが、自閉症の人々も同じ人間として社会的存在であることを認めるならば、それはとりもなおさずわれわれ親や養育者との関係性が、必然的に彼らの発達に色濃く反映されることはごく当然の事実として受け止める必要がある。自閉症の人々の情緒発達の理解と援助は、われわれとの関係性を抜きにしては考えられないことを最後に筆者は強調したいと思う。

追記：本来ならば、本稿のタイトルに沿って、自閉症者本人に対する精神療法の意味について言及しなくてはならなかったかもしれない。ただ筆者は自閉症の基本的心性を自己と他者の融合的世界と想定しているため、彼らが人生の最初に出会い、その後最も大きな影響を受けている主たる養育者である母親との間のコミュニケーションの成り立ちに最大の重要課題があると考えている。それゆえ、本稿で再三再四述べてきたように、母子間での情動的コミュニケーションが豊かに展開するための心理的援助がまずもって図られなければならない。母親への精神療法的援助の重要性を強調したのはそのような理由による。

本研究の一部は平成5年度厚生省「精神・神経疾患研究委託費」(5公-5)による「児童・思春期における行動・情緒障害の病態解析及び治療に関する研究」(主任研究者：栗田 廣)の分担研究として行われた。

文 献

- Emde, R. N. and Sorce, J. F. (1983) The rewards of infancy : Emotional availability and maternal referencing. In J. D. Call, E. Galenson & R. Tyson (eds.) *Frontiers of Infant Psychiatry*. pp. 17-31, New York, Basic Books.
- 小林隆児 (1991) 青年期自閉症の精神性的発達について. 児精医誌, 32 : 205-217.
- 小林隆児 (1993) 精神遅滞と自閉症——自閉症の認知障害に関する再検討——. 神経精神薬理, 15 : 773-779.
- 小林隆児 (印刷中) 自閉症にみられる妄想形成とそのメカニズムについて. 児精医誌.
- 小林隆児・村田豊久 (1977) 自閉症児療育キャンプの効果に関する一考察. 児精医誌, 18 : 221-234.
- 小林隆児・村田豊久 (1990) 201例の自閉症児追跡調査結果からみた青年期・成人期自閉症の問題. 発達の心理学と医学, 1 : 523-537.
- 小林隆児・新保友貴 (1990) 思春期の自閉症児をもつ母親への心理教育的アプローチの試み. 発達の心理学と医学, 1 : 91-97.
- 鯨岡峻 (1990) コミュニケーションの成り立ち. 教育と医学, 38 : 507-514.
- Williams, D. (1992) *Nobody Nowhere*. New York, Times Books. (河野万里子訳 (1993) 自閉症だったわたしへ. 新潮社)